

【48】 忠臣蔵と大雪

毎年暮れになると、赤穂浪士47人が吉良の屋敷に討ち入りする「忠臣蔵」のドラマがTVでも放映されるのが年末の定番になっていますが、昨年もその例に漏れませんでした。

討ち入りのあったのは元禄15年12月14日の深夜で、その日に江戸は大雪が降ったというのがドラマの場面を引き立てていますが、少々気にかかることがあります。

江戸、東京の冬の気象は、現代の統計では、最低気温は1月及び2月に生じ12月はそう寒くありませんし、降雪をみるのは1月、とくに2月であって12月しかも中旬の14日の大雪というとしっくり来ません。

実はマニアックな知識になりますが、元禄15年12月14日は、当然ながら当時の暦の上でのことで、現代の太陽暦では西暦1703年1月30日のことになります。

もう2月になろうかという1月末のことなら、東京で大雪が降ってもそう異常な話ではないのですが、12月中旬の大雪といわれると違和感を覚えるのです。

江戸時代の暦は、現代では「旧暦」と称され、学問的には「太陽大陰暦」といわれる部類に属します。

月の満ち欠けの一周期29.5日を一ヶ月の基本にした「大陰暦」は、1年間の日数が354日で、365日を1年とする「太陽暦」より短いのです。

何年か経過すると暦と季節とのズレを生じ農業に支障が出るので、大体3年に1回（詳しくは19年に7回）、「閏月」（うるうづき）というのを入れ、1年を13ヶ月とする閏年を設けます。

このように、太陽暦に適合するように補正した大陰暦を太陽大陰暦というのです。

実際の補正作業は種々の天文現象をも考慮する複雑なもので、江戸幕府の天文方（てんもんかた）の大切な仕事でした。付言すれば、現在では暦の管理は国立天文台が行っています。

結果として旧暦は毎年の年そのものが太陽暦の年とは大体しか一致せず、ましてや月日に至っては異なるのが普通で、歴史上の出来事の正確な月日は確認作業が必要です。

まあ、忠臣蔵のようなドラマ仕立ての話しに、こんなあげつらいを言っても始まらず、暮れのおしつまった12月の事と割り切って楽しみましょう。